

## [報告]第 19 回歴史地震研究会に参加して

産業技術総合研究所 活断層研究センター\* 宮下由香里

Impression Report of 19th General Meeting

Yukari Miyashita

Active Fault Research Center, AIST,

Central 7 1-1-1, Higashi, Tsukuba, Ibaraki, 305-8567 Japan

### § 1. はじめに

第 19 回歴史地震研究会は、9 月 7 日から 9 日までの 3 日間、富山県立山カルデラ砂防博物館において開催された。7 日午後、8 日午前が研究発表会、8 日午後が市民向け講演会、9 日が巡検見学会という、もりだくさんの豪華スケジュールであった。私は 7 日午前のプレ巡検を含め、全日程に参加させていただいた。本研究会初参加にして、実に印象深く、楽しい 3 日間を過ごすことができた。

私は活断層の活動履歴調査に携わっている。今年度から調査をはじめた牛首断層は、1858 年に飛越地震を引き起こしたとされる跡津川断層の北側に、約 10 キロの間隔を置いて併走する活断層である。この「お隣さん」と少しでもお近づきになりたいと、今回の研究発表会に参加した。

### § 2. 研究発表会の印象

歴史学、地震学、地質学、防災工学・・・まず、バラエティーに富んだ講演内容に驚いた。はっきり言って、全く分からない話もある。しかし、聞いたことがない分野だけに、興味も覚えた。特に刺激となったのは、歴史資料を丹念に解読していく類の研究だった。ローカルな断層や地質の調査を積み重ね、普遍性や一般性を見つけていく地質学の手法と同じだ。また、三陸の「津波石」が実は間違いであったという発表も面白かった。「間違いだったとわかったので、是非とも発表しなければと思った」という山下さんの清々しい語り口に引き込まれると同時に、このような情報発信も重要なのだなあと、しみじみ思った。学会・研究の細分化が進み、ともすると狭い井戸の中にいるだけで安心してしまいがちな昨今の自分を省みる好機となった。

市民講演会は「検証・1858 年飛越地震」と題され、立山カルデラ砂防博物館名誉館長でもある伊藤和明氏の司会で進められた。「安政五年飛越地震について」「富山県の地震について」「跡津川断層系の地形地質と防災」「カルデラに挑んだ一世紀 立山の砂防」「昭和 44 年豪雨の体験から」の 5 つの講演から構成されており、いずれも私がお目当てとしていたものである。しかし、会場が狭いという事情から聴講は一

般市民優先となってしまう、これらの講演を聴くことができなかった。残念である。

講演会にあぶれた参加者に対し、急遽、富山県立山博物館見学コースが用意された。この博物館が大変面白かった。「立山信仰の舞台」として、立山周辺の自然の紹介あり(跡津川断層のはぎ取り標本も展示されていた)、「立山信仰の世界」として、立山曼陀羅をはじめとする品々の解説ありと、まさに立山を満喫することができた。

### § 3. 巡検会の感想

巡検見学会は、A コース(健脚山班)、B コース(穏健山班)、C コース(平野見学班)の 3 コース。私は A コースに参加した。

朝 8 時 15 分、予定通りホテル前を出発、大山町歴史民俗資料館へと向かった。本来は休館日のところを、わざわざ開館してくださったとのこと。奇しくも、「よみがえる有峰の狛犬と歴史・文化」の展示があり、大変に興味深く見ることができた。狛犬とは阿吽の対になった犬くらいの知識しかなかったが、実は一方は獅子で、他方は牛(もともとは角を持っている)なのだそう。前日に立山博物館でちょっとした狛犬談議があったのだが、見事西山さんの説があたっていた。

その後、紅葉がはじまりつつある峡谷美と、跡津川断層による断層地形を眺めながら、小一時間ほどバスに揺られると、真川露頭に到着した。ここは跡津川断層で最も有名な断層露頭で、真川湖成層と呼ばれる堆積物と基盤の花崗岩とが、ほぼ垂直な断層面で接していた。様々な文献で見たいものの、やはり実際に見る大露頭は圧巻であった。花崗岩が破碎されて、ここまでグサグサになるまでに、規模、回数とも一体どれくらいの地震を経験したのだろうかと思うと、活断層の最近 2~3 回分の活動履歴がはかないものに思えてくる。

続いて、いよいよ立山カルデラ内にバスで入った。カルデラ内に入るための「関所」では、全員ヘルメットをかぶった(バスの中なのに...)。六九谷からの遠望後、多枝原からさらに間近で鳶崩れを仰ぎ見た。残念ながら、ピークはガスに覆われていたが、なるほど、

\* 〒305-8567 茨城県つくば市東 1-1-1 中央第 7

これくらいの大崩壊が起こると、7日にアクセスバス巡検で見てきた、富山平野の土石流氾濫地形が作られるものかと、納得した。

昼食は立山温泉跡(写真1)奥の吊り橋を渡った先にある、泥鱒池のほとりで食べた。池の中央に気持ちよさそうに浮かんでいるブイは、生態調査のためのカゴを沈めている場所なのだそう(國香さん談)。

午後は、水谷対岸から砂防ダム群を見学した後、白岩砂防ダムから水谷まで歩いた。白岩砂防ダムサイト脇には、参加者待望の「立山温泉」があり、安らぎのひとつを楽しまれた方々もいた(写真2)。砂防ダム上からの眺め、水谷に至る真っ暗なトンネルも含め、遠足気分を満喫しつつ水谷に到着した。

水谷からは巡検を締めくくるにふさわしい、トロッコ列車の旅だった。約二時間のあいだに22回のスイッチバックを繰り返し、標高差620mを下るトロッコ列車からの眺めは、深く心に残った。



写真1. 立山温泉跡にて。



写真2. 現在の立山温泉。

#### §4. おわりに

1858年に跡津川断層で発生した飛越地震の際に、

大鷲・小鷲山が崩壊し立山カルデラ内に天然ダムが形成された。これが約2週間後とさらにその1ヶ月半後の2度にわたって決壊し、常願寺川の大洪水を引き起こし、富山平野に大災害をもたらした。断層露頭、崩壊・土石流の痕跡、現在も進められている砂防工事の様子など、このストーリーにまつわるすべての場所を見学することができた。

そればかりではなく、立山曼陀羅や狛犬に関する知識(雑学?)等々、たくさんのおまけもいただくことができた。また、8日夜の懇親会后、ホテルの一部屋に寿司詰め状態で行われた狂乱の二次会は、忘れたくとも忘れられない光景となって脳裏に焼き付いた(写真3)。

末筆となりましたが、本研究会の企画、準備、巡検会の案内をしていただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

#### <余談>

7日朝、富山駅北口発の会場へのアクセスバスに乗り込む直前、仕事でしか持たない携帯電話が鳴った。なんか、イヤな予感…。「あ、宮下さんですか? 穴倉です。今、羽田行き的高速バスの中です。すごい渋滞です。たぶん、乗れません。ハイ。次の便で行きます。佐竹さんと岡村さんも一緒です。あと、よろしくお願いします…。」言いたいことだけ言って、その電話は切れた。

別の用件で前日から富山入りしていた私は、アクセスバスでの人数確認を頼まれていた。歴史地震研究会の事務局が、同じ職場内にあるためである。私自身はこの会のメンバーではない。当然、段取りも全く聞いていない。事情をバスの運転手さん、参加者の方々に伝えると笑いの後、皆一様に不安げな表情をされた。「このバスはどこに行くのか?」「富山空港だと思います。」「私も不安だった。しかし、約20分後、富山空港で参加者の本隊(?)と無事合流することができ、私たちの不安は払拭されたのだった。



写真3. 楽しい(狂乱?)二次会。